

ジャーナリストから大学教授へ

—中屋健一先生のパイオニア人生—

第10期 久保田 誠一(1962年卒業)

はじめに

晩秋の夕刻、西日を浴びた樹木の影がキャンパスを薄いねずみ色に染めていた。

大学3年の1960年10月、4限の授業を終えてアメリカ科の研究室を覗くと、中屋健一先生が長方形のテーブルの隅でレポートを採点していた。室内は薄暗く、電灯はついていない。

テーブルに積み上げられたレポートを取り出すと、サッとページをめくり、洋数字で78とか81とか、点数を書き込み次のレポートへ。

まさしく電光石火の早業。

近寄りたがたい雰囲気漂い、距離を置いて先生の仕草を見詰めていたが、丹念にレポートを読んでいるようには思えない。

採点を済ませてタバコを吹かす先生に「レポートを最後まで読まないで採点できるのですか」と恐る恐る訊ねると、ずばり一言。

「オレは新聞記者を10年以上やってきた。書き出しの数行を読めば、原稿が面白いかどうかはすぐわかる。レポートだって同じことさ」

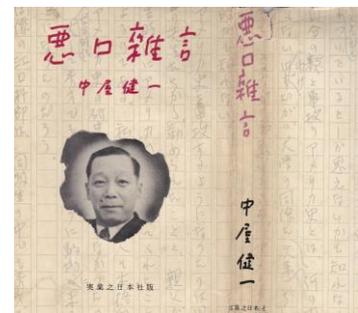
新聞記者ってそんな「特技」の持ち主なのか。先生の説明に納得したわけではなかったが、私が朝日新聞の記者になり、その後大学教授になってみて、先生の一言が正鵠を得ていたことを実感した。書き出しを読めば、中身はおのずと見当はつく。まさしくその通りだった。数10人の誤字だらけで論脈不明のレポートを読むことは容易ではない。そんなとき、私はアメリカ科の研究室で目撃した「中屋方式」を参考にさせていただいた。

私の自画像

先生の著書の一つ「悪口雑言」(実業之日本)は「私の自画像」から始まる。

「どうひいき目にみても、私の顔は美男子という柄ではない。色男でない以上、金と力はあるはずであるが、これもあるといい切る自信は全くない。右唇の上にきわめて明瞭なホクロがある。自分ではビューティー・スポットのつもりであるが、これも他人からみたら鼻くそでもついているとしか思えないかも知れない。

自分の専攻のアメリカ史とは、元来何の関係もないわけだが、大学の同僚たちに比べて、多少ガラの悪いところ、アメリカ西部的なのかも知れない」



(著書「悪口雑言」 実業之日本社)

この数行を読めば、先生のざっくばらんで、齒に衣着せずに物をいう性格の持ち主であることがうかがえる。後半部分は生立ちの記である。

「親父(中屋取式)が船会社(大阪商船、のちに合併を繰返して現在の商船三井)に勤めていた関係上、ずいぶん子供のときからいろいろのところを歩いた。福岡県門司(現在の北九州市門司区)生まれで北海道育ち、これも荒っぽい性格をつくる要素に入っているかもしれない。小学校を転校すること五回、中学は小樽と東京開成、高校は成蹊、という有様である。おかげで、いつも転校生特有の強心臓となった。大学を出てからも、南北アメリカ、南アフリカ、中国、南方諸国をほつつき歩き、世界中、知らないところへおっぼり出されても平気という一種のバガボンド的な性格をもつに至った」

先生の歩みをわが身と照らし合わせてみる。私は疎開で小学校を五回変わった。転校は決してうれしいことではなかったが、転校のおかげで新しい環境に対応する能力が高まったように思う。大学を出たあと新聞記者として世界九十国余りを歩き、いまでも未知の世界に足が向く。中屋先生とは在学時代だけでなく卒業後も仲良くしていただいたのは似たような体験をしてきたせいかもしれない。

I 高校、大学、大学院

旧制成蹊高から東大西洋史学科へ

中屋先生は旧制成蹊高校(以下、成蹊高と略記)を卒業すると、東大文学部西洋史学科に進んだ。入学は1930年(昭和5年)、卒業は33年(同8年)である。

なぜ西洋史を専攻したのか。先生は書く。

「(成蹊高時代に)西洋史の先生の講義に腑に落ちないことがあったので、高校の図書館から、数冊の西洋史概略書を借り出して、片っ端から調べてみた。どれも講義の内容と違うので、次の時間に質問をし、先生を教壇に立ち往生させてしまった。級友たちがけしかけるので、それから毎時間『予習』をしていって質問し、先生を困らせることにした。おかげで高校生としては西洋史に関する限り相当ものしりになった。もちろん、私をして西洋史を専攻させる動機になったのである」(前掲書)

高校時代から先生の立ち振る舞いには迫力があつたことは想像がつく。教師はたじたじで、質問する学生はビューティー・スポットをピクピクさせながらご満悦。こんな光景が目には浮かぶ。

西洋史学科同期生には江口朴郎(東大)、井上幸治(神戸大)、島田雄次郎(茨城大)、今来睦郎(九州大)、尾鍋輝彦(御茶の水女子大)など逸材が揃っていた。大学院生活を早々と切り上げ菊池寛を慕って文藝春秋に入社した池島信平も同期の一人で、中屋先生とは昵懇だった。先生は親友を「江口朴郎は同級生の中でも秀才だったから現在の商売(東大教養学部教授、国際関係論)がもっとも身についていたが、池島信平などは学者になっていたら、どんなに優秀な大学教授になっていたかわからない」(「雑誌記者 池島信平」塩澤実信 文藝春秋)と褒めている。

人生の転機になったアメリカ旅行

1931年(大学2年)の夏、6月から9月にかけてシアトル、ロサンゼルス、サンフランシスコなどを歩き回った。先生にとって初のアメリカ行である。

この旅で、人生行路を決定づける出会いがあった。

サンフランシスコの安宿でたまたま法政大学野球部一行と泊まり合わせた。法政大学は30年秋の六大学秋季リーグで初優勝し、米国遠征はそこご褒美だった。

法政野球部一行の中に、ハワイ生まれの日系二世、若林忠志がいた。リーグ戦を一人で投げ抜き、同大を優勝に導いた立役者。のちにプロ野球阪神タイガースに入団しエースとして活躍した名投手である。

若林は「君はアメリカで何をやっているんだ」と訊ねる。先生は「東大の西洋史学科の学生でアメリカ見物を楽しんでいる」と答える。話をしているうちに、共通の友人がいることがわかり、若林からロサンゼルス在住の日系二世弁護士を紹介された。

先生は果敢な行動派である。この話を聞くやロスにすぐさま移動し弁護士と会う。弁護士は「歴史は浅いけれどアメリカは面白い国だよ」といって、ハンティントン・ライブラリー(Huntington Library)に連れてってくれた。そこにはマックス・ファーランド(Max Farrand)教授が待っていた。同教授から話を聞いたことで、アメリカ史に心が傾く。

中屋先生は旅行中にごく普通のアメリカ人とも会話を交わしている。汽車の中で「お前はどこから来たのか？」と尋ねられ、「日本から初めてやって来た」と答えると、面白い返事が戻ってきた。「日本とアメリカは違うぞ。アメリカには天皇はいない。天皇のいない国は面白いからよく、調べてみろ」。様々なアメリカ人と接触するうちに、アメリカに対する好奇心をかき立てられたようである。ロスからシアトルに戻り、船で帰路につくころにはアメリカ史をやってみる気になっていた。

アメリカ研究に好意的だった教授陣

西洋史学科の主任教授の村川堅固は古代史、山中謙二は中世史、今井登志喜はイギリス史、斎藤清太郎はロシア史といった具合で、アメリカを専門とする教授はいなかった。アメリカ史を研究したいと心に決めて帰国したものの、心配だったのは先生たちの反応だった。

「主任である村川先生の家をある日、池島と一緒に訪ねて、『実はぼくはアメリカにいつてきて非常に面白かったからアメリカ史をやろうと思うのですけども、どうでしょうか』と相談したところ、『アメリカは非常に重要な国だ。大いにやりたまえ』といわれた。

今度は斎藤清太郎先生に訊いたんだ。『私はロシア史を教えているけれども、アメリカとロシアはともに日本の隣の国だし、これから日本に影響のある国。アメリカの歴史も学ばねばならない』といわれた。今井先生にも相談したのだが、えらく賛成してくれた。

西洋史の先生が自分の専門でないにもかかわらず、3人ともアメリカ史の必要性を理解してくれ、励まされて、それではという気になった。卒論には米西戦争(1898年、キューバとフィリピンを舞台にアメリカとスペインの間で争われた戦争)を取り上げた。スペインを破ったアメリカはハワイを併合し、フィリピンを領有するわけだが、フィリピン領有をめぐる賛否両論があった。ここに

焦点を当てた。スペイン語の文献を読む必要があったので、2年と3年のとき、外語のスペイン語専修科(夜学)に通った」

中屋先生のアメリカ旅行と西洋史学科の先生方の対応ぶりの記述は、嘉治元郎、斎藤眞、新川健次郎などが先生にインタビューしてまとめた「AMERICAN STUDIES IN JAPAN ORAL HISTORY SERIES VOL.4 中屋健一先生に聞く 東京大学アメリカ研究資料センター1978」から引用。以下、同書は「中屋先生に聞く」と略記する。その後の先生の引用文で、出典を明記していないものも同様である。

リベラルな雰囲気のカンパス

文藝春秋1969年2月号に「なぜ大学教授は無力なのか」と題する先生の長文の原稿が掲載されている。これを読むと、教師や同僚に恵まれた大学生生活だったことがよくわかる。

「私たちが学生時代の東大文学部の西洋史学科の雰囲気は、昭和の初めとしてはきわめてリベラルであった。これは学生にとって有難いことだった。私たちは、大いに遊び、青春をエンジョイした。学生の中には、今でいう右翼もいれば、左翼もいたし、またノンポリもいた。お互いに議論はしたが、仲が良かった。斎藤清太郎先生のように、学生が頭髪をのばしすぎていると、理髪店につれていって、ご自分で料金を払うという先生もいたし、今井登志喜先生のようにお酒が好きで、学生たちが訪れるとすぐ酒を出される先生もいた。いかめしい主任教授の村川堅固先生のお宅にうかがって歓待されることもしばしばだった。酔っぱらった今井先生を新宿の飲み屋から、池島信平と二人で夜中に千駄ヶ谷のお宅まで担いでいったこともあった」

中屋先生の独特の教育のやり方や学生との付き合い方は、西洋史学科で体験した先生と学生との関係を下敷きにして生まれ、ジャーナリストの経験によってきびしさが加味されたように思える。

大学院で「米国史」を執筆

西洋史学科を1933年に卒業した26人の中には逸材が多く「昭和8年組」として後輩たちに語り継がれている。

ところが、リベラルな雰囲気の中で、師にも恵まれて学園生活を謳歌した彼らの前に厳しい現実が待ち受けていた。先生たちが入学する前年(1929年)、ウォール街の株価の急落に端を発した恐慌が世界中に広がり、不況の波は日本経済にも波及していた。31年、奉天郊外で発生した柳条湖事件は関東軍の満州への侵略の引き金になり、15年におよぶ日中戦争へと泥沼化していく。

不況のどん底時代で、「大学は出たけれど」だった。前出の尾鍋輝彦によると「西洋史学科を卒業した26人の中で、卒業式までに就職が決まっていたのは、地方高校の先生になるヤツひとりだけだった。ほとんどは大学院にいった」という。大学院といっても現在のような筆記試験(第1、第2外国語、専門科目)と面接試験といった厳格なものではなく、学内選考と面接だけだった。

先生は大学院組の1人で、村川堅固の計らいで33年から高木八尺の指導を受け米国史の研

究に励む。「アメリカ研究の開拓者」といわれる高木は法学部の教授で、リベラルな学者だった。「貴重な蔵書をいつも快く貸して下さったが、お返しするときが大変である。読後感を必ず聞かれ、満足な返事ができないと、もう一度よく読み返すように命ぜられるのが常だった。この高木先生の学問に対する厳しい態度は、怠惰な私に大きな刺激を与えてくれたことはたしかである」

先生は大学院時代の3年間に13本の論文を書き、本格的なアメリカ史概説書にまとめている(この原稿は誠文堂新光社より1948年に「米国史」として出版された)。1936年には外務省の依頼によりラテン・アメリカ諸国へ調査旅行に出向き、帰途スタンフォード大に立ち寄って、前述したファーランド教授と再会してアメリカ史の資料収集をおこなった。高木八尺をして「中屋は良く学び良く働く」と感心させているのである。

中屋先生が大学院生として高木研究室に席を置く直前まで、高木の助手を務めていたのが松本重治だった。先生は松本を慕い以後35年にわたって親交をもつことになる。この件は後述する。

「アメリカ史は歴史ではない」と九大主任教授

「昔の大学院は3年で満期退学、卒業とか終了とはいわない。満期退学が近づいてきたころ、ある日、今井登志喜先生が『お前は福岡県の出身だから、九州大学へいかないか』といってくれました。『いきます』といったのですが、2、3週間たったら今井先生がだめになったというのです。『どうしてですか』と訊いたら、『九大の主任教授がアメリカ史は歴史ではないから採らないっていうんだよ』。結局、九州大学へは京都大学の小林さんがいったんだ」

(九州大文学部同窓会事務局に問い合わせると、小林という方は1937年(昭和12年4月、九大文学部に専任講師として赴任された小林栄三郎(近現代史)ではないかという)

中屋先生がああとき九大に講師として採用され、助教授、教授の道を歩んでいたら、九大がアメリカ史研究の一拠点になり、アメリカ史を教える教授やアメリカに強いジャーナリスト、アメリカ通の実業家が多数誕生していたかも知れない。

アメリカ科の歴史は中屋先生抜きでは語れない。九大教授になっていたらアメリカ科の様子も変わっていたろうし、アメリカ旅行の際に、サンフランシスコの安宿で法政の名投手、若林忠志に巡り合わなかったら、マックス・ファーランド教授との面談は実現しなかったはずである。人と人との出会いは不可思議なもので、運命的なものを感じさせる。

Ⅱ ジャーナリスト時代

入社試験日に2・26事件

先生が大学を卒業したときには日本も世界不況に巻き込まれ企業の倒産が相次いでいた。就職できたのはたった1人、それも地方の高校の教師だった。卒業生の多くは大学院に「一時避難」したわけだが、それぞれ3年の間に職場をみつけては大学を去っていった。最後まで残ったのは先生と江口朴郎の2人だった。江口が外務省の嘱託になると、残りは先生だけになった。「生来

のん気者だから山やスキーを満喫していた」というが、内心穏やかでなかったのではないか。

そんなとき先生に同盟通信社(以下、同盟と略記)を受けるように促してくれたのが松方三郎だった。彼は首相を務めた正義を父にもち、ジャーナリストや登山家として知られ、同盟の初代調査部長を務めた。二人は日本山岳会の会員で、「山」を通じて親交があった。「霧ヶ峰でスキーを楽しんで帰京すると、松方さんから手紙が届いていて、同盟通信の入社試験が2月26日にあるから、鉛筆と弁当をもって銀座の本社にきなさいとしたためであった。先輩がいてくれるのだから新聞記者にでもなるかと思って出かけた」

1936年(昭和11年)2月26日といえば、皇道派青年将校ら1400人が決起した2・26事件の日である。都心には夜来の雪が積もっていた。新聞記者時代のことはあまり口にしない先生だったが、この日のことは学生時代に何度も聞かされた。

「市電に乗って三宅坂まできたら、剣付鉄砲がずらっと並んでいる。遠回りして新橋に出て、銀座へ行って同盟にたどり着いた。そうしたら社内は、岩永祐吉社長以下大騒ぎ。こっちはなんのこともかさっぱりわからない。『入社試験を受けに来ました』といったら『ばかもん』とどやされた。入社試験どころじゃなかったわけだよ。私を誘ってくれた松方三郎さんを探し当てて挨拶すると、しばらくして、社長命令で入社試験は中止、そのかわり社に到着した順に入れてやることになったといわれた。同盟に一番乗りしたのはぼくだったから、一番で合格さ」

同盟は1936年1月1日、新聞聯合通信社(以下、聯合と略記)と日本電報通信社が合併して誕生した。初代の社長は1920年に国際交流を目的とした「岩永通信」を発行し、聯合の専務理事を務めた岩永祐吉である。国家主導のニューズ・エージェンシーとして戦時報道に主力を注ぎ、国際的にも名声を博すが、45年9月14日、連合軍総司令部(GHQ)によって業務停止命令を受け、10月31日に解散。同盟は9年間で消え、通信社としての業務は共同通信、時事通信に引き継がれた。

従軍記者として北京—太原を走破

中屋先生は同盟一期生として入社すると社会部に配属になり、盧溝橋事件(37年7月7日)が起こると北支戦線に派遣され、従軍記者として北京から太原まで200キロを無線技師、連絡員をともなって走破し、日本軍の活動を報じている。記者としては駆出しの域を出なかったが、山で鍛えた体力に物をいわせて他社のベテラン記者を圧倒したという。

その後、従軍記者の資格をもちつつ上海支局から香港支局次長へ。1938年12月22日、ハノイで汪兆銘が発した声明文を香港で受信し東京の本社に打電している。

国民政府のナンバー2、汪兆銘は蒋介石の主張する「抗日」に反対して「救国和平」を唱え、秘かに日本側と接触し重慶を脱出しハノイに入り、日本軍との和平を発表した。先生はこの声明文の日本への送信に一役買われたわけである。

ところが、激動の中国特派員勤務は2年足らずで、39年5月にはマニラに初代支局長として赴任する。

この件で、嘉治元郎(教養学部教授、同学部長)が「マニラは、希望されたわけですか」と質問

すると、先生は「マニラに飛ばされたんだよ」と答えている。「飛ばされる」とは、何か事情があって配置(任地)換えになることを意味する。中国で何があったのか。先生は上海や香港における特派員時代のことは何も書いていない。

国会図書館で先生の本や論文を調べたが、中国に関する書物が1冊あった。しかし、それは戦後の1946年に上梓された翻訳本だった。

—奉天事件より無条件降伏まで—(連合軍総司令部民間情報教育局資料提供)

一般閲覧室の奥にある小部屋に保管されていてコピーは不可。貴重品扱いである。

本文の概略は45年12月8日の全国紙に紹介されているので、「訳者のことば」を紹介する。そこには先生の軍部に対する怒りが込められている。

今次戦争が日本にとって全く無意味な戦争であったことは、既にわれわれが充分理解していることである。しかし、この無意味なりし戦争が何故に起こったか、そして又日本軍部がわれわれの自由をいかに横暴に奪い去り、善意なる国民を偽瞞して来たかについてこれを明確にすることはその渦中に巻き込まれていた日本人の立場を以てしては今のところ極めて困難である。連合軍総司令部の論述した太平洋戦史は第三者としてこの問題に明確な解決を与えている(原文のまま)

フィリピンで三面六臂の活躍

中国は先生にとって未知の国で中国語も話せなかった。フィリピンは大学の卒業論文に米西戦争におけるフィリピン領有の是非を論じており、この国の歴史に精通していたし、スペイン語も話せた。勝手知った「土俵」だった。

当時、同盟の編集局長だった松本重治の評価は高い。

「マニラ支局長としての中屋さんは実力を発揮して三面六臂の活躍だった。本社の指令した同盟通信の現地での日本文版、英文版の通信発行などのほかに Sunday Informer という週刊の英字新聞の発行もやった。排日記事の多いほかの諸新聞に一矢を酬いるために、日本の名誉のために、ねつ造記事や逆宣伝記事を叩き続けた」(渦潮18、中屋健一先生還暦記念号)

39年5月から2年半におよぶフィリピン駐在を終えて帰国したのは41年9月、太平洋戦争が勃発する直前だった。先生は「フィリピンでは割合に暇だったから、アメリカの本を読むことができたし、アメリカ人にも付き合いができた。高等弁務官とか役人だけではなく、アメリカ人の先生とか新聞記者とも接触できて面白かった」と、マニラ時代を懐かしんでいる。

フィリピンについて「フィリピン」(興亜書房)と「新東亜とフィリピン」(同盟出版局)を上梓している。アメリカ史研究者として「フィリピンの独立はフィリピンが実力を以て獲得したのではなくして、米國がフィリピンに与えたものであった」ことに主点を置きつつ、フィリピン人が東洋人としての光輝ある自覚をもっておらず、在留邦人がフィリピンの歴史、とくにアメリカとの関係に無知であることを嘆く。

二冊ともフィリピンを知る参考書といえるが、「フィリピン」をめくって驚いた。大本営海軍報道部

第一課長(海軍大佐)平出英夫の「推薦」が冒頭に掲載されているではないか。

「本書の著者中屋君は日本人最初のジャーナリストとしてフィリピンに駐在し、アメリカの压制下に喘ぐフィリピン、しかも自らは無力にしてよくその压制に反抗し得なかったフィリピンの眞實の姿をみてきたのである。大東亜建設、新しき南方の認識のためにはどうしてもフィリピンを知らねばならぬ。本書は、その内容の適確とともに、まことに時宜を得たものとして弘く江湖に推薦する。昭和十七年二月」

先生と海軍報道部とはどんな繋がりがあったのか。この疑問は先生の経歴を調べていくうちに解けた。帰国後は政治部に籍を置いたが、12月8日、太平洋戦争勃発とともに海軍省嘱託を兼務していた。この関係から平出大佐による「フィリピン」の推薦文となったのだろう。

43年4月に赤紙が来て応召、45年9月まで東日本を管轄する陸軍東部司令部の情報班に配属された。軍隊でどんな仕事をされたのかなどについても、何も書き残されていない。「空白の2年半」である。

共同通信では渉外部長

同盟は45年10月、連合軍総司令部(GHQ)によって業務停止(解散)を命じられ、11月1日から共同通信と時事通信が新業務を担う。共同は新聞社、放送局、時事は一般購読者をそれぞれ主な対象とした。先生は同盟の同僚とともに共同に移る。新しいポストは渉外部長だった。編集局長は松本重治、調査局長が松方三郎、ともに先生を引き立ててくれた先輩だった。

「渉外部長というのは何をするのかというと、毎日 GHQ にいって、新聞系のヤツと会っていろいろな話を聞いたり、情報をとったりする仕事なんだ。そのうちに日本人にアメリカをもう少し知らせなきゃいけないと考えた。日本人はアメリカのことをさっぱりやっていない。そこでまた高木先生(高木八尺)に相談にいったわけだ」

先生は斎藤眞にこう語っている。

共同の渉外部長として GHQ 通いを続けているうちに、教壇にたつ気持ちが芽生えたことがうかがえる。

47年1月に共同を依願退職する。「ぼくはそのころには原稿を書いてめしが食えたんだ。アメリカのことを書けば何でも売れた。だから翻訳してもいいし、雑文を書いてもいいし、アメリカではこうですなんていうことを書きゃ何でも売れた時代で、そのころから評論家だった」

Ⅲ 東大教養学科の20年

女子専門学校で「足慣らし」

共同通信を依願退職したのは47年1月、東大の講師になったのは51年4月。この間、先生は何をされていたのか。足跡を辿るうちに、戸板女子専門学校の名が出てきた。

聞きなれない校名だが、女子高等教育学校としての歴史は古い。「明治クリスチャン教育家」の一人、戸板関子が1902年(明治35年)に芝公園に開いた戸板裁縫学校が元祖で、1946年に

女子専門学校に、50年に女子短大に昇格し、現在に至る。

先生はここで47年4月から50年まで講師、教授を務めた。なぜ戸板女子短大だったのか。この辺の事情を先生は次のように記述する。

「戸板女子短大の校長をしていた青木英夫君（戸板関子の娘婿）の親父が東大西洋史学科の主任教授、村川堅太郎（先生の恩師、村川堅固の息子）のところに、アメリカ史を個人教授してくれる人を紹介してほしいと頼み込んできた。その話がぼくのところに回ってきた。個人レッスンをしてやっているうちに、専門学校が短大に昇格するから学生にもアメリカ史を教えてもらいたいと頼まれて教授になった。教授といっても給料は非常勤講師並みだったが、米をたくさんくれたな」

教養学部事務部長、青木庄太郎によれば、「先生は戸板女子専門学校に勤務しながら、東大文学部、日大芸術学部、千葉工大、成蹊大、東大新聞研究所で講義をし、教養学部での活躍の素地を形成されていた」という。

スタートは非常勤講師

新製の東大に教養学部が全国の大学に先駆けて創設されたのは1949年5月31日で、教養学部の後期課程として教養学科（アメリカ科など6分科）が発足したのは51年4月1日である。後期課程は2年の後半から開始されるから、アメリカ科の授業は50年9月から始まっていたことになる。

中屋先生がアメリカ科の「生みの親」であり、「育ての親」と思っている方が多いはずだが、先生は教養学科創設には直接関与していなかった。

新川健三郎から「先生は、設立と同時に東大に？」と問われて、「いや、そうじゃない。設立時にぼくはスタンフォードにいたんだよ。51年3月に帰って来て4月からここ（教養学科）にきたので、授業は半年前から始まっていたわけだ。ぼくが講師として着任するまでの半年間は高木八尺先生が『アメリカの政治』を講義してくれていた。東大を定年退職された先生が短期間にせよ教壇に戻るということは異例の措置だったのではないかな」と答えている。

「駒場に来てみたら、本郷の新聞研究所の教授になってくれといわれて、ごたごたしてしまって、はじめの51年4月から52年1月までは非常勤講師だよ。そして、52年2月に助教授に昇格した。教授になったのは59年だから、助教授時代が7年もあり、『万年助教授』なんていわれた。非常勤から助教授の時代にはアメリカ人のポールズさんが形式的にはアメリカ科の主任みみたいな形になっていた。ただ、ぼくが実質的には主任教授の役をしていたがね」

ポールズとは文化人類学者ゴードン・ポールズのことである。宣教師の子として東京に生まれ、ハーバード大で学位を取得。一高で英語を教え、教養学科では文化人類学のほかに「現代アメリカ」を講じていた。ポールズの教えを受けた本間長世（一期生）は「教養学科の学生を自宅に招いて家族ともどもお茶の時間を楽しみ、英会話の練習もできるようにしてくださった。私が東大を卒業後、アマー・スト・カレッジに留学したのは、ポールズ先生が大きな大学よりも小さなカレッジの方が丁寧な指導を受けられるし、友達もつくれると進めてくださったからでした。戦後の日本の教育改革について助言をされたし、教養学科が創設されたときはアメリカ分科の初代主任だった」と、

「向陵一高百二十五年記念」で回顧している。

西安事件をスクープした松本重治

教養学部長矢内原忠雄はアメリカ科の初代主任教授として「大物」を据える構想を抱いていた。米国留学後、法学部教授高木八尺の助手を務めたあと、1932年から38年まで聯合、同盟の特派員として中国に滞在し、西安事件の大スクープで国際ジャーナリストとして勇名をさせた松本重治である。

西安事件における松本(当時の役職は上海支局長)の活躍について触れておく。この事件を簡略に記せば、1936年12月12日、張学良らが国民党総裁(行政院長官)、蒋介石を西安で監禁し、共産党との内戦を停止し、抗日のために国共合作を合意させた兵乱を指す。

松本は中国の歴史を動かすことになる西安事件をいかにしてキャッチしたのか。

12月12日夜8時、上海の料理店で友人の中国人ジャーナリストと会食中に同盟南京支局長芦田英祥から電話が入る。「南京と潼関の電話連絡が途絶えています。蒋介石院長は目下西安にいるはずですが、何かが起こったのかもしれない」

支局に戻った松本は家族同士でテニスを楽しむ仲である喬輔三に電話を入れた。彼は行政院長代理、孔祥熙の秘書をしていた。

松本が「西安にいかれた蒋介石院長の身边に何か異常があったのか。南京がただならぬ雰囲気のようなのですが」と問うと、喬は「重大事件だよ」と返答した。

喬の説明によれば、今日(12日)払暁、張学良の部隊と、楊虎城の部隊が兵乱を起こし、西安郊外の華清池温泉に蔣院長を監禁しているという。

松本は上海支局次長下条雄三の協力を得て数本のスクープを東京本社に送った。一本目は「蒋介石院長が西安郊外の温泉に向かったまま消息不明になっている」と短く報じ、続いて「張学良の兵変と蒋介石の監禁」、「張が蒋介石に突き付けた8項目の要求」などなど。

松本のスクープは翌日、朝日新聞、毎日新聞などに大きく報じられ、本社で英文化され海外にも発信された。(「松本重治伝」開米潤 藤原書店)

松本はなぜ主任教授を断ったのか？

松本は体調を崩して38年12月に帰国し、同盟の編集局長、常務理事などを歴任、ロックフェラー一三世など米国に幅広い人脈をもっていた。矢内原と松本は神戸中学の先輩後輩の仲間でもあった。

以下に紹介する松本の話は「AMERICAN STUDIES IN JAPAN ORAL HISTORY SERIES VOL9 松本重治先生に聞く 東京大学アメリカ研究資料センター1980」からの引用である

本間長世は松本本人に単刀直入に問う。「矢内原先生が松本先生に、アメリカ科の初代主任教授に就任してほしいと懇請されたが、松本先生がお断りになったとうかがっています。その辺の事情をお話いただけませんか」

松本が本間に答えた。「矢内原先生は私が岩波書店の『世界』に書いたトーマス・ジェファーソン

の文章を読んで高く評価してくださり、アメリカ科の主任教授にどうか声をかけてくださったのだと思っています。折角のお誘いをお断りしたのは東大の給料が安すぎたからです。私は戦争後公職追放になり、子供たちを食わせるために弁護士をやっていました。それでバターを食べさせられたのですが、東大の給与ではバターを食べられないことがわかりお断りしました。矢内原先生は、また機会があったら頼むから来てくれよといわれました」

国際文化会館で学生に講義

松本重治は国際文化会館の創設に尽力し、52年に同会館専務理事、65年から理事長(現理事長はアメリカ科二期生、明石康)を務めた。彼が専務理事時代の1958年10月から翌59年3月まで、アメリカ科の非常勤講師を務めていたことはほとんど知られていない。

「松本重治先生に聞く」からの引用。質問者は本間長世、斎藤眞の二人。

— 東大側から依頼があったのですか？

矢内原学部長から機会があったら頼むといわれていましたからね。駒場にいくだけの時間がなから、こちら(国際文化会館)に来てくれればやりますといったら、お願いしますという。学生さんは月曜日にバスで来てくれました。

— どんな講義をされたのですか

第二次大戦後のアメリカの外交と政治との関係に関連させながら10回か15回講義をしました。各人に本を渡してブックレビューを書いてもらったこともあります。この講義のためにぼくは一生懸命勉強しましたよ。

— 先生の授業にはコーヒー・ブレイクがあったそうですね。

およそ1時間半くらいの講義ですけど、ぼくは二度脳血栓をやり、言語障害が残っていたので非常に疲れるんですよ。だから1時間位したらコーヒー・ブレイク。ぼくがコーヒーをご馳走して、学生さんはバス代を自分で払う。値段は同じくらい(50~60円)じゃなかったですか。

— 松本先生の講義を聴けた学生は果報者でしたね。どんな顔ぶれでしたか。

3年生が大部分で、一部は4年生でした。NHKにいて死んでしまった出先(昭)君がいた。井深千鶴子さんはよくできました。滝沢修の息子(滝沢壮一)もいた。そうそう新川君(健三郎)も教えてんですよ。全部で10数人来てくれました。(8期生が中心だった)

— 成績を付けるときに中屋先生から「注文」があったそうですね。

中屋君が電話をかけてきて、「みんな優にしてくれませんか」というんですよ。学生に対する評価はできていたのですが、彼が「どうしても」というので、しょうがないから全員「優」にしました。

松本にはわずか半年だったが、アメリカ科非常勤講師は思い出に残る経験だったようで、「学生さんは中屋先生の情熱を込めた教育のおかげで、みんなアメリカ史に関する十分な知識を習得しており、素晴らしい英語力をもっていました。中屋先生に叱咤激励されたためか原書の読書力はもちろん、聴く力も話す力も、役にたつレベルにまで達していました」と学生を称賛し、「中屋先生にいじめられた学生たちは、卒業後も先生を慕い、恩師として年に一度はちゃんこ鍋に招待するし、時々私もよんで楽しいひとときを過ごさせてくれました。大学教授と学生との間が、中屋先生とアメ

リカ科の学生たち之间的のように、うれしい人間関係をもってもらいたいと思うのは私一人ではありませんまい」と拍手を送っている。(前掲の「渦潮」)

万年助教授と相撲の番付

中屋先生は1951年4月に東大教養学部で非常勤講師として招かれ、52年1月に助教授に昇格した。59年には教授に就任するが、教授になるまで助教授を7年間務めている。何かと話題になり、物議を醸す記事を雑誌で紹介したのは「万年助教授」と称した助教授時代である。

「万年助教授モノ申す」(文芸春秋57年2月号)で、先生は疑問を投げかける。「不思議に思うのは、相撲取りでも負ければどんどん下がってくるでしょう。三根山のように。大学の先生は下がらないですね」

(三根山は東京都出身で、37年に初土俵、53年から3年間大関を務めたが、その後平幕に転落し60年に引退した。真っ向勝負を挑む力士でファンが多かった)

司会の高橋義孝(九州大学教授)が「相撲取りのようにすると面白い」と応じると、先生はこう答える。

「ところが、この価値判断の基準が難しい。ソ連のように(試験を)やるというのはちょっと無理だし、教授、助教授でも何年かのうちに、なにか業績をあげなければだめだというふうにしたらどうか。ぼくがどこかの学長になったら、即座に全員を集めて、過去何年間にアカデミックか、ジャーナリスト的な業績をあげないものは辞表を出せといおうと思う」

先生は大学の年功序列を重んじたぬるま湯体質が腹立たしくてたまらなかったことがうかがえる。

前掲の「悪口雑言」に「力士と大学教授」と題する以下の文がある。

「封建的だとか何とかいわれているが、相撲の番付だけは、すくなくとももともと民主的なものであろう。それは、多少の運、不運はあっても誰がみても実力主義だからである。大衆は実力によって上位に躍進していく力士に拍手を送るが、弱くなればどんどん下位に転落する元大関には、同情こそすれ、次第に関心を払わなくなる。しかし、大学では上位にのぼれば下位に下がることはない。実力のない教授がいくたのすぐれた若い学者の上位躍進を阻んでおけることは問題である。名前だけの横綱や大関は、どこの社会でも無用の長物である」

女子大学無用論

文芸春秋に「万年助教授」の座談会が掲載されたのは57年2月号だが、ライバル誌だった新潮(新潮社)の同年同月号に、先生は「女子大学無用論」を書いている。

「私の友人で、ある女子大学の教授が外国へ留学することになったので、その留学中、臨時講師として2年間、初めて女子大学というものの門をくぐってみる機会を得た」

「一言でいうならば、女子大学は当然のことながら女子学生だけをまとめて甘やかした教育をしている。これは、女性が男性よりも肉体的に劣っているからというので、婦人専用車を連結して走っている国鉄電車と同様である。女性でも男性よりも肉体的に強い人もあるように、女子学生でも男子学生よりも優秀な素質をもっている学生もいる。しかし、婦人専用車的な女子大学で教育されれば、いかに優秀な素質をもっている、その特性を伸ばす機会に恵まれず、結局は、男性に比し

て知的に劣る女性になってしまうのである」

矛先は落第がないことや卒業論文におよぶ。

「女子大では病気などで休学しない限り、授業料など払うものさえきちんと払って、あとはウロウロしていれば、4年目にはちゃんと卒業できるという甘さがある」「女子大には、卒業論文というものがたしかにあるが、その大部分は『作文』に過ぎず、どうみても卒論の體を成していない。男女共学の大学では絶対にありえないことである」

アメリカでは新しく創立された大学では女子大というものは見当たらない。19世紀に創立された女子大学でも、スミスがアマーストと、ラドクリフがハーバードと、教授を交換したり、教室を共用したりして、事実上男女共学を行うところが多くなってきている。

こういう米国大学事情を紹介したうえで、御茶の水女子大に言及する。

「東京教育大學に出講するときいつも思うことだが、向かい側のお茶の水女子大學も、もともとは高等師範學校だったのだし、一緒にやったらどんなもんだろうと考えるのである」

新潮の原稿を読めば、先生の唱える女子大學無用論は、言い換えれば男女共学の勧めであることがわかる。

先生が雑誌や新聞に書かれた文章には「無用論」が多い。「女子大學無用論」のほかに「文部省無用論」、「『身の上相談』無用論」、「婦人週間無用論」、「学割廃止論」などなど。

題名だけみると、無謀な論を振りかざしているように感じるが、中身は至って正論である。「女子大學無用論」については記述した通りだし、「文部省無用論」では、大学の学長などの人事に同省が介入することに異を唱えたもので、「学割無用論」では学生に与えられている特権に疑問を呈している。先生は新聞記者の経験から「社会の木鐸」たらんとしていたのではないか。

学生、雑巾説の真意

中屋先生は「なぜ大学教授は無力なのか」(前掲書、文藝春秋)で、授業の方法や学生との接し方などについて説明しているので、関連する部分を紹介する。小見出しは筆者が付けた。

授業はすべてセミナー

「本当の教育は少人数でなければ不可能だと思っている。幸いにして教養学科は少人数なので、授業はすべてセミナーである。だから、私は一人一人の学生について、その特性、欠点を知ることができ、個人的な指導ができる。家庭の事情もよく知っているから、就職や大学院への進学、外国留学などについても比較的楽に相談に応じることができる」

時間の厳守、遅刻が減点

「授業はきびしく、試験は甘く、というのが私のやり方である。この方針が良いのか悪いのかは別として、授業は1分も遅れず定刻通りに開始する。時間を守るということは、社会人となってからも大切なことであり、学生だから時間にルーズで他人に迷惑をかけてもよいということはないと考えるからである。だから、いくら頭が良く、勉強するからといって、レポートの提出が締め切りに遅れれば、いい点は付けられない。拙速主義だと一部の学生は文句をいうが、私はその方がよいと思っている」

学生と雑巾は絞るほどよくなる

「教養課程は1年半なので、毎年秋に2年生が入学してくる。彼らは猛烈な勉強をさせられるので、大いに面食らう。1週間に2回もレポートの提出を命じられるし、原書を200頁も読まなくてはならない。学問は体力と気力だとハッパをかけられ、脱落する弱虫もいる。かわいそうだと思うが、私の訓練についていけないような学生は、社会に出ても役に立たないし、将来研究者になる資格はないと思うからビシビシ絞り上げることになっている。学生というものは、雑巾みたいなもので、絞れば絞るほど良い、というのが、私の学生に対する教育方針である」

ジャーナリストと教育者

「大学院を満期退学したあと、同盟通信の記者として10年間過ごした。この経験は教師として大変役立った。文章らしい文章を書け、英語が使えるようになったのは当時の社会部長と外報部長の訓練の賜物だったと思う。

歴史を書くことと、新聞記事を書くことには共通点がある。それは重要な事実とそうでないものを区別して判断するということである。私は今になって新聞記者としての10年間の経験が、研究者としても教育者としても役立っていると確信している」

アメリカ科の「ドン」、駒場を去る

1971年3月31日、先生は東大を定年で退職された。

アメリカ科の「生みの親」ではなかったが、「育ての親」

として20年間、事実上一人で取り仕切り、「ドン」と呼ぶにふさわしい存在だった。

先生は退職に先立って発行された「渦潮」18(中屋健一先生還暦記念号)に次のように記している。

「私が駒場に招かれて来たのは1951年4月であるから、定年退職時でちょうど20年になる。20年というと人生の3分の1であるので、多少の感慨がないわけではない。終戦直後の混乱時で、金もなく本もなく、ろくな食事もできず、教室にストーブもなかった20年前は、ただ精神力だけで駒場にアメリカ研究を確立することだけに努力を集中していた。

現在では考えられないような侮辱的な妨害行為をした教官もあり、これらと闘うことも私の大きな仕事であった。

しかし、私は、実際に業績をあげることが何よりも重要だと考え、学生を訓練して、アメリカを研究した者は、社会人として役に立つ人間たらしめることだという確信を抱いていた。このやり方が成功であったか、失敗であったかは、私自身の口から評価すべきではないが、私個人としてはほぼ満足すべき成果をあげたと思っている。

(中略)

幸に、私はまだまだ元気であるので、駒場を去っても、アメリカ研究は続けるつもりである。具体



(中屋先生/最終講義で)

的にどういふふうにやるかは、まだはっきり決めてはいないが、旧版の『米国史』は早い機会に改訂増補したいと思っている」

「米国史」は先生が大学院時代に執筆したもので、戦後の1948年、誠文堂新光社から出版されたことは前述した。日本初の本格的アメリカ史概説書だったが、戦争直後のことでまもなく絶版になり、アメリカ研究に携わる人たちからは「幻の名著」といわれていた。

「渦潮」には、先生を東大に招いた高木八尺が「回想」と題して興味深いエピソードを紹介している。

「終戦直後のころ、アメリカ学会の事務所の置き場に苦心したとき、駿河台の昌平女学院の一室を借りて一時の寓居が可能となったのも、中屋さんの努力の賜物であった。そのころ、雑誌『アメリカ文化』を立教のアメリカ研究所から受け継いで、『アメリカ研究』と改称し、発行に力を注いだ。調節柄必要な紙の配給獲得に少なからず困難したことがあった。中屋さんはそのような面倒にも身を以って当たられ、あるときなど印刷上の急に應じるため、自分で用紙の重いリールを肩に担いで市中を運ばれたこともあった」

前出の教養学部事務部長、青木庄太郎は「50年10月にアメリカ史研究のためスタンフォード大へ出張以来、今日まで世界各国へこれほど頻繁にいかれた方はめずらしい。とくにアメリカには国内旅行のように頻繁に出かけられた。その行動力、実行力、企画力といい、驚くばかりでした」と賞賛し、「このような先生を失うことは残念である」と結んでいる。

先生は駒場を「卒業」したあと、成蹊大学で72年から79年まで教授を、75年から79年までは成蹊高校の校長も兼任した。旧制成蹊高校の出身だから晩年は母校で教鞭をとられたわけである。

最後まで執筆を続ける

先生が亡くなる3日前の87年3月25日、一期生の井出義光の下に中屋先生から葉書が届いた。「『米国史』改訂版原稿やっと終わりました。そのことで近いうちに一度会いたい」と書かれていた。先生が東大を退職されるに当たって発行された「渦潮」の文中にある「米国史」の改定増補版のことだった。井出は執筆の進捗具合をたびたび聞かされていたので、人ごとながらほっとする思いで葉書を読みだした。しかし、文面の最後に「実は10日くらい前に軽い発作を起こし、目下体調を崩しています」とあった。彼は驚いて電話すると、「たいしたことはない」といわれたので、「3月末日のアメリカ学会年次総会でお目にかかりましょう」ということで電話を切った。井出が先生と交わした最後のことばになった。

井出は先生の死後、書斎の整理役を担う。机の上に山と積まれた200字詰め原稿用紙は「米国史」に加筆訂正したものだった。彼は先生が死の直前まで執筆を続けていたことを知って愕然とする。

「亡くなる直前に完成された本書の原稿が、最後まで気迫に満ちたものだったことをぜひ付け加えて書いておきたい。しかし、執筆中お体の痛みにも苦しまれることもあったであろう。内容の重複、古すぎる数字などが散見されたので、削除、加筆、訂正などの作業をさせていただいた。これは先生もお許しになることであろうと、私は勝手に想像している。1988年2月 井出義光（「新米国史」あとがき）

井出は当時、筑波大教授をしており、参考文献の整理には同大大学院生、年表の原案作成には先生の成蹊大の教え子の協力を得て出版されたのが「新米国史」(誠文堂新光社)である。発効日が先生の一周忌の1988年3月28日となっている。学生時代に購入した同書を私は書架の「特等席」に収めている。

おわりに

私が朝日新聞のニューヨーク支局長時代(1983年5月～87年1月)に、先生に「ぜひアメリカにお出でになりませんか」と東京のお宅に電話をすると、「糖尿で透析を受けている身だからアメリカには行けない」という返事だった。

87年1月に外報部に帰任したが、「ニューヨーク報告」などで全国を飛び回り、昭和天皇のXデーの準備に追いまわられているうちに、先生の訃報が届いた。3月28日だった。生前ご挨拶できなかったことはいまでも残念でならない。

思い出されるのは大学4年生の夏休み前、先生に就職の相談に出向いたときのことである。61年7月、場所は冒頭に記した駒場のアメリカ科研究室。

「先生、朝日を受けようと思うのですが・・・」

藪から棒の問いに戸惑われたのか、先生が口を開かれるまでに、少し時間がかかった。

「お前は朝日じゃなく、毎日に入れ」

今度はこちらが意味を解しかねて沈黙。

「毎日の出版局に配属させてもらって、サンデー毎日の記者をやるんだな」

なぜ朝日新聞ではなく、サンデー毎日なのか。口にはしなかったが、ますます頭が混乱してきた。

先生は手にしていたタバコを脇に置くと、ケラケラ笑い出した。

「お前はサンデー毎日じゃないか」

こちらも吹き出してしまった。私が授業そっちのけでスキーに夢中になっていることを先刻ご承知だったのである。城山三郎のベストセラー「毎日が日曜日」が世に出る10年も前の話である。

ここからは先生の真面目なアドバイスだった。

「オレが推薦文を書いたのではオマエは絶対に落ちる。朝日はオレを嫌っているからな。オレも嫌いだ。嘉治に書いてもらえ。そうすれば必ず受かる」

先生はその場で嘉治真三に電話をしてくれた。嘉治はアメリカ科で「アメリカの経済」を教えていた。私が出席する数少ない授業だった。彼の兄、嘉治隆一は朝日の編集担当の取締役をしており、弟の真三が兄に直接私を推薦する一文を記してくれたわけである。

筆記試験を通過して面接。会社側の中央には「花見酒の経済学」などで知られる笠信太郎、そのわきに嘉治隆一。笠は無言で、嘉治が「君は東大のアメリカ科を専攻しているんですね」と一言。



(弘子夫人と4人のお孫さんと先生)

これで面接は終わり、ほどなく合格通知が電報で届いた。

中屋先生に報告にいくと、「オレがいった通りだろう」といってビューティー・スポットをピクピクさせてご満悦だった。

「学生は若き友人である」として、われわれを時にはきびしく、時には親身になって指導してくれた中屋健一先生が逝かれて今年(2017年)で30年、記念すべき年に拙文を認め、黄泉の先生に捧げる。